

第六章「智徳の弁」（その二）

A. 大意。

1. 「徳育批判」

世の「徳行家」たちは、「徳義は百事の大本、人間の事業、徳に由らざれば成るべきものなし」とか、この世の中に「徳教」がなければちょうど闇夜に灯を失ったのと同然だとかいって、ある「徳行家」は「ヤソの 教え」を導入するべきだと主張し、別の「徳行家」は「神道の衰えたるを復すべし」、「儒教倫理」や「仏法」を広めなければならないと主張し、異説争論、今や「徳育」こそ現今の火急の急務であるかの観を呈している。しかし余輩からみれば、それは狼狽も甚だしいというものだ。「余輩の眼には自から又別に見る所あり」。（資料1）。

2. 「東西文明の差」は「智恵の差」だ

今や「徳育」について、「東西の学者」達が頻りに自家の教えを主張し、ある者はその書を著し、ある者は他の説を駁して、争論止む事がない。そのなかにあつて、「西洋流の学者」は「ヤソの教え」を「文明に便利なり」とし、「神儒仏の教え」を「文明に迂遠なり」と主張している。その論拠は、どうやら、「ヤソの教え」の方は「文明の国」で行われて文明と共に並立しているが、「神儒仏の教え」の方は「不文の国」で行われて文明と共に並立する事が出来ないという事にあるようだ。しかしそのような差が実際何処にあるのかといえ、それは東西の「教え」の差にあるのではない。「教え」の差ではなく「智恵の働き」の差なのだ。東西の「教え」は「教えの本体に於いて力の強弱あるに非らず、その本体を装うて光明を増すべき智恵の働きに巧拙の差あればなり」（p. 166）。「ヤソの教師」の方は博学多才、宗教と共に「文学技芸（学問技術）」を学び、「法教と共に学芸を教え人を智域に導くがゆえに、文明と並立して相もとらざるのみ」（p. 166）。

3. 方今我邦至急の「求め」は「徳義」ではなく「智恵」なのだ。—「智恵」を重んじなければならぬ「時局論」的理由—

今仮に二つの「求め（必要なもの）」があつたとして、そのうちどちらを先に選ぶか、ということを決める場合には、二つの「求め」のうち「最も不足するもの」から先に選ばなければならないのは当然であろう。今現在我が国にあつて、「徳義」と「智恵」とのうちどちらが「最も不足するもの」なのであろうか。現今我々の眼前では、「ヤソ（西洋）の教え」と「神儒仏（日本）の教え」が相駁しあつて、争論止む事ない状況が続いている。このことは「東西の教え」が正しく伯仲の間にあるということを示している。日本には「徳義」は十分あるのだ。それに対し「智恵」の方はどうか。日本人の智恵と西洋人の智恵とを比較してみれば、その間に、何から何まで、比較にならないほどの差があることは明白である。（資料2）。「畢竟彼我の智恵の相違は牛と猫との如くにして互いに争端を開かざるものなり。是に由りて之を觀れば、方今我邦至急の求めは智恵に非らずして何ぞや」。

4. 「徳義」のみを重んじ「智恵」を疎かにすることは人の「天性」を妨ぐるの挙動である—「智恵」を重んじなければならぬ「人間論」的理由—

「三匹の猿」の石像は「耳目口」こそ悪徳の元であるとして、「見ざる、聞かざる、言わざる」、堪忍の徳を奨めている。これは「世の人をば悉皆悪しき者と思つて之を救わんとするの趣意なるべし」。しかし、「耳目口」を持つ人類は果たして本来悪のみを為すものなのであろうか。そうではない。人の生涯の行状を平均すれば、善悪相混じて善の方が多し筈だ。 『教の行届かざる古代の民に善

人あり、智力発生せざる子供に正直なる者多きを見れば、人の性は平均して善なりと言わざるを得ず」。世の「徳育論者」は文明の洪大なるを知らず、文明の雑駁なるを知らず、人心の働きの多端なるを知らず、唯一心一向この世の悪人を少なくせん事を欲し、都会をして田舎の如くならしめ、大人をして小児の如くならしめ、衆生をして石の猿の如くならしめんとするの陋見に陥っている。人類がその天性を十全に發揮する事こそ、文明の究極の目的である筈だ。然るに、人類をして人非人の不徳を免れせしめんと私徳の一方のみを教え、その結果人生天びんの智力を退縮せしめるのは、「畢竟人を蔑視し人を压制してその天然を妨るの挙動と言わざるを得ず」。(資料3)。

5. 「人天並立」は人類が其の天性を全うし、人類がその本分を達した段階で出現する。

人間たるもの、この世に生まれて、「徳義」を身につけ「一身の始末」をつけさえすれば、それで人間たるものの職分をはたした、ということにはならない。衣食住はいうにおよばず、蒸気電信の利、政令商売の便等これらすべて人間交際における「智恵の賜」以外の何物でもない。人間交際において人が「智恵」という自己の天性を發揮しないで、「坐して」他人の「智恵の賜」を受けるということに「理」がある筈がない。人の精神の發達は限りないものだ。無限の精神でもって、天地宇宙の事物すべてを精神の内に包羅して洩らすことがないところにまで到達するに違いない。人類がその本分を達したその段階では智徳の区別を云々する必要は無くなる。その段階は「恰も人天並立の有り様なり」。いつの日かきっとその日が到来するに違いない。(資料4)。

B. コメント

1. 「人の性は平均して善なりと言わざるを得ず」。

福澤がルソーに似た「性善説」的人間観を持っていたことはこの言葉からも明白である。そのような人間観に基づいて福澤は次のように「徳育の方法」を論じている。「徳育」が目指すべき最も肝要な点は人間が本来持っている「善」の発生を妨げないようにすることである。その人の天性にないものを外側から賦与しようとするものは誤りである。つまり「徳義」は人力の教えのみによってつくべきものではない。「之を学ぶ人の工夫に由て発生するものなり」。(資料5)。「徳義」は人(「教育者」)が外部から注入するものではない。その人が自らの工夫によって創り上げていくものなのだ。福澤の「徳育批判」の根底には福澤のこのような教育観が息づいていることを見落としてはならない。

2. 万物を精神内に包羅する→「人天並立」

デイドロを中心とするフランス啓蒙思想家達は天地宇宙に存在するすべてのもの—「自然現象」、
「社会現象」、
「精神現象」のすべて—を精神内に包羅するべく、万物の定義づけを試みた。そこに出現したのが『エンサイクロペディ(百科全書)』である。「百科全書派」のこの試みは「理性(智恵)」を尊重しそれに期待をかける啓蒙思想の特徴をよく表わしている。福澤はこのような啓蒙思想をストレートに継承している。啓蒙思想は基本的には人間中心主義で人間の生存と快樂のためには「自然」を支配しそれを利用してよいと考えている。福澤も啓蒙思想を継承し人間の自然支配のなかに文明的進歩を見ているが、その究極に「人天並立」つまり「人間と自然の調和」を理想としていたことは注目に値する。

